



Flyn' to the Sky

京都府立大学 国際交流委員会

ニュースレター

Mar. 2017 Vol.9

目次

1. 中国 東華大学と国際交流協定を締結しました
2. 西安外国語大学からの交換教員としての1年を振り返って
3. トビタテ！留学 JAPAN オーストラリア奮闘記
4. ～海外への扉～ 留学交流会を開催しました！



中国 東華大学と国際交流協定を締結しました



このたび本学と中国上海市にある東華大学との間で国際交流協定を締結しました。協定締結に先立ち、3月6日、東華大学から外国語学院書記林嶸副教授、国際合作処副処長趙明煒副教授、外国語学院院长補佐・日本語学科主任趙萍副教授、外国語学院日本語学科副主任王蕾副教授の4名が本学を表敬訪問されました。本学からは、築山崇学長のほか、藤原英城文学部長、文学部日本・中国文学科の小松謙教授、安達敬子教授、鳴海伸一准教授と交流担当教員である林が出席し、今後どのように学生交流・学術交流を発展させていくかについて、意見や情報を交換しました。

東華大学は全国重点大学の一つで、紡織学院、服装与芸術設計学院、旭日工商管理学院、機械工程学院、材料科学与工程学院、人文学院、外語学院など13の学部を有する総合大学です。1951年に華東紡織工学院として創立され、1985年に中国紡織大学、1999年に東華大学と改称した歴史からも窺われるとおり、紡織科学が国家重点学科として特に有名です。このほか材料、服装、工学、貿易、日本語などの学科も高く評価されています。学生総数は約30,000名（学部生14,000余、大学院生7,000余、継続教育学歴生4,000余、留学生4,000余）で、日本人留学生は約800名が在籍しています。東華大

文学部 日本・中国文学科
准教授 林 香奈

学は1954年以来外国人留学生を受け入れており、現在も留学生の受け入れと学生・教員の海外派遣に力を入れています。

キャンパスは、服装与芸術設計、工商管理、国際文化交流などの学部のある延安校区と、紡織、機械工程などの理系学部と人文、外語などの文系学部のある松江校区に分かれています。延安校区は上海市街の大変便利なところにあり、漢語教育を受ける場合はこちらのキャンパスで学ぶことになるでしょう。主要学部のある松江校区は上海市西南郊外の松江区に位置しています。上海市中心部からは地下鉄で行くことができ、「松江大学城」駅周辺は、東華大学のほか上海外国語大学（松江校区）、上海工程技術大学、上海對外貿易大学、華東政法大学など複数の大学が集まった文教地区となっています。松江はかつての呉の地に属し、古くから紡績業の中心地として栄えた地域でもあります。また、陸機・陸雲兄弟、趙孟頫、陶宗儀、董其昌、陳子龍など多くの文人にゆかりのある地で、豊かな文化や歴史を有し、沿線には七宝という水郷の町や醉白池などの庭園もあります。

今回の交流協定では、留学希望者があれば、両大学の学部生、大学院生を毎年各2名以内、半年以上1年以内という条件で相互に派遣し、受け入れるところから学生交流を始めることとなります。本学の学生は短期語学研修生としての派遣も認められています。両大学の学生が現地で中国語や日本語を集中的に学習したり、専門の授業を聴講したりすることによって、語学力の向上と専門知識の習得の機会が得られるだけでなく、互いの文化や

歴史に対する理解をさらに深めることによって、友好関係の発展とそのための人材育成にも繋がっていくことが期待されます。また、教員間においても、要請に応じて本学教員が東華大学において短期集中講義や講演を行ったり、東華大学の教員が本学で研究したりする機会を設けるなどして、学術交流を展開していく予定です。



今後の学術交流に関する懇談の様子

西安外国語大学からの交換教員としての1年を振り返って



新入生研修

西安外国語大学 交換教員 教授 孫 敦夫

た、テキストの内容をもっと指導してほしいという学生、或は中国の文化についてもっと知りたいという学生も度々研究室まで来ていました。学生たちの中国語や中国への理解を深めることができたのではないかと思います。これ以外に、学生たちと一緒に新入生研修に行かせて頂いたことを通じて学生との個人の交流もできました。

教職員との交流。職員向けの中国語の授業は週一回で一年間やっていました。この授業を通して職員の方々の中国語はもちろん上達できたと同時に、職員の方々との交流もできました。中国に行ってきた、又はこれから行こうとする職員の方もいました。これ以外に、文学部や生命環境学部の先生方、文学部教務や企画課の職員の方々とも交流を重ねてきました。先生と職員の方々から日本や京都の文化についてたくさん教わって私の京都の文化に対する理解も深まったと思います。

京都での一年間の滞在の中で、京都の方々から頂いた温かい友情を西安外国語大学の学生たちにお伝えするとともに、見学してきた歴史を持つ名勝旧跡も紹介しようと思います。

最後に、西安外国語大学と京都府立大学の更なる交流ができることを祈念して原稿を終わらせて頂きます。



西安外国語大学と京都府立大学との国際交流の一環として、昨年の4月から中国の西安から京都府立大学に来ており、あっという間に一年間経ちました。この原稿を書くことによって、この一年間の交流を振り返ってみたいと思います。

交流は三つの面から述べることにします。まず、学生と授業を通しての交流、また学生と授業以外の交流、それから教職員との交流、になります。

まず、学生と授業を通しての交流。語学の授業は単に言葉の勉強だけで終わるのではなく、その言語の背後にある文化をバックグラウンドとして学生たちに提示しなければならぬと思います。そのため、授業でテキストに関わる中国の文化や、日本の文化との関連性を持つ内容を、画像か映像で紹介することで、学生たちがそれらの内容に興味を示していました。異文化に対する理解の意欲が高まれば、国際交流を試みようという行動につながるのではないかと思います。結果からみれば、西安外国語大学と京都府立大学との友好交流活動に参加したり、中国政府招聘の訪中団の募集に応募したり、また西安外国語大学への短期留学に行く学生が見られました。長い目から見れば、学生たちのこれらの行動はこれからの中日友好につながるものと確信しています。

学生と授業以外の交流。授業以外の時間に、中国に行く前の大学院生と学部生への指導も行いました。現地です実用的な中国語を指導すると同時に、文化の相違点も学生たちに理解してもらうことを心がけていました。ま

トビタテ！留学 JAPAN オーストラリア奮闘記

生命環境学部 森林科学科 2回生 村山 大明

トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラムとは？

官民協働で取り組む留学支援制度です。アカデミックな留学のみならず、海外での「課題・発見解決」や「実践活動」に焦点を当てた留学プランを自由に組立てて応募でき、教育上有意義な学修活動と認められれば留学費用を含めた支援が受けられます。今回はトビタテ5期生として採用された村山さんのオーストラリアでの活動内容を寄稿頂きました。

私は今、2ヵ月半の語学学校を終え、WWOOFでボランティア活動している。WWOOFとはWorld Wide Opportunities on Organic Farmsの略称だ。「世界に広がる有機農場での機会」の意味で、「食事・宿泊場所」を提供する側をホスト、「力」を提供する側をウーファーという。1日4時間～6時間の労働提供による給与の支払いが無い代わりに食事と宿泊場所の無償提供をしてくれる制度で、オーストラリアで発展した。活動拠点は「ジャスミン・アロマティック・オーガニクス」(Jasmin Aromatique Organics)、世界中にファンを持つ高品質オーガニックコスメブランドの自社農場&ファクトリーでジャスミンの本社だ。ゴールドコースト中心部より車で45分、緑豊かな「マウント・タンボリン国立公園」の延長線上に位置している。土地のピュアな湧き水と、ローズやジャスミン、アボカドなどのフルーツ、ハーブといった多種多様な植物を有機栽培し、製品の加工、製造が行われている。ここで働くにあたって、受入先に60通におよぶ英文メールを送った。運よく3通の返事をもらうことができ、その中からここを選んだ。オーナー夫妻、イタリア人とドイツ人のマネージャー2人、ウーファーのドイツ人女性5人、私、男性1人の11人の一軒家の共同生活だ。個室の割当があり、夕食のみ、リビングキッチンで当番の2人が作る食事をみんなで食す。

マウントタンボリンはゴールドコーストが一望できる場所でもあり、天気の良い日はゴールドコーストに夕日が沈んでいくところを山から見下ろすのも美しい。朝は6時起床、清々しい空気の中、苗に水をやる。5時間半芝刈り機で芝を刈り、木の下草を草刈機で刈るのが私の仕事だ。機械がよく壊れるのでメンテナンスが上手くなった。雑草の抜き取りも仕事の一部だ、私は、玄関先の木の下に草が生えていたので一掃した。なんとその草はオーナー夫妻が育てていたバジルなどのハーブだったのだ。そんな失敗や共同生活ではドイツ人女性5人と私1人の人間関係摩擦を感じる事もある。

週の5日一日5時間の労働をし、週末は「オーストラリアの Gondwana 多雨林群」内に属する「ラミントン国立公園」の森林散策に出かける。Gondwana 多雨林は、クイーンズランド州東南部とニュー・サウス・ウェールズ州北東部にまたがる大森林地帯で、総面積は36万6455haに及ぶ。50以上の保護区があり、16カ所の自然資源が一括して世界遺産に登録された。亜熱帯、乾燥、温帯、寒帯のそれぞれに属する植物が植生する珍しいエリア。世界最古のシダ類や170種を超える絶滅に瀕した植物群など、貴重な植物を数多く見ることができる。約37種のコウモリ、約270種の鳥類、約75種の哺乳類なども生息。公園には樹上30mを歩くツリー・トップ・ウォークがあり、鳥になった気分が森林散策が楽しめる。

■ パーマカルチャーについて (今回の学修目的の一つ)

「パーマカルチャーという考え方は、自然と調和した生き方を心がけ、地域の人々と助け合って、モノや労働力を分かち合う暮らしを目指す。」



庭の手入れをしている村山さん

こちらの食卓にあがる野菜は自家栽培でももちろん有機野菜、味は甘みが強くとてもおいしい。はちみつも自家製で、花のフレーバーがかかっているように芳香高い。日本では、鹿やいのししに畑や田んぼを荒らされるといって、網や電気柵で囲っているが、ここでは、一切見かけない。「少しくらいなら食べていいよ。」という感じだ。多種多様な動物や虫たち、そして人間が共存共栄して、循環している。自然と人間の調和を目指す。そのために、物質の循環を一番に考え、日々の活動を行う。それがこの基本の考え方だ。

パーマカルチャーの創始者ビル・モリソンは、すべての資源とエネルギーを高度に循環させていた日本の里山文化を非常に高く評価している。「君たちは、日本の先達から謙虚に学ぶことだ……引き継がれてきた暮らしの文化の底にあるパーマカルチャーを感じてほしい」(「ビル・モリソンの想い」より) オーストラリアの歴史は浅いが、日本には、はるか昔から綿々と受け継がれ熟成されてきたものがあるという事だ。大切なのは、その土地に合った事を先人に学ぶことであり、よく観察することではないだろうか。私はオーストラリアに来て日本を外から見ることで、それを知る事が出来た。

■ トビタテに参加すること(七転び八起き)

私がトビタテに応募したきっかけは、入学当初学校の勉強についていけず落ちこぼれだったからだ。自分の不甲斐なさや劣等感に苛まれ、それらに頭が支配され何度も学校を辞めようと思った。しかし思い直し、クラスメイトに助けられながら前向きにやろうとした。でも、3回生に進むことができない。私は留年を受け止め、「災い転じて福となす」ストーリーを考えた。それが、トビタテを利用し半年留学することだったのだ。トビタテは計画書を書くのに一番時間を割いた。計画性の重要性を学んだ。トビタテを知ってもらいチャレンジしてほしい理由は、個性豊かな人々が留学という同じ志をもったものたちで意見交換できるという点だ。意識の高いメンバーとのやり取りは自身が感化され、知らないことを知るきっかけになり考えることが増えた。

■ 最後に

こんな私にもチャンスをくださった学校に感謝すると共に携わってくださったすべての関係者の方に、この場を借りてお礼を伝えたい。まだ、私のストーリーは始まったばかりだ。道は険しくあらゆる困難なこともあるだろう。しかしいかなる時も、この経験で得た不屈の精神と持ち前の明るさで乗り越えられると確信する。

～海外への扉～ 留学交流会を開催しました！

2016年12月15日(木)に国際交流委員会と京都府立大学生協の共催で留学交流会を開催しました。プログラムの中で2名の留学経験者にスピーチをして頂きましたので、下記に紹介させていただきます。両名とも今後留学を考えている後輩達に向けての熱いメッセージを投げかけてくれました。



レーゲンスブルク大学 中期留学

欧米言語文化学科 3回生 石ヶ森未喜



私は2016年3月から7月までドイツのレーゲンスブルクという町に留学していました。ここでは、留学に関して私が考えていることを話したいと思います。

まずは言語に関することですが、会話するときすべてを理解する必要はありませんでした。言語を学ぶことは、語彙を学ぶことだけでなく、むしろ、私たちが日本語を話す感覚を知っているように、その言語の感覚を知ることなのだと思います。実際に使われる言葉を聞きながら生活すると、あなたの中にそれらが蓄積されていって、言語を使うセンスはどんどん磨かれていくはずですよ。

次に、友人についてです。知り合いのいない外国での学生生活において、気心のしれた人がいるのといないのでは生活全体の充実度が変わってきます。言語の時点で身構えがちですが、周りの人はみな等身大の学生です。そのような、相手へのちょっとした親近感が出発点です。好意を向けられて嫌がる人はほとんど居ませんし、少し食い気味なくらいがちょうどいいです。

最後に、私は留学の本当の目的は何かを「経験すること」ではない、むしろその経験を通じてどう思い自分がどう変わったか、ということだと思っています。経験は目的ではなく手段です。留学中、あなたは普通の大学生活では経験できないたくさんの方に出会い、それを通じて変わっていくでしょう。経験して考えて成長する、これが私なりの、留学をする本当の意義です。

留学前に私は「失敗したらどうしよう。」と考えていました。留学に行こうと考えるとき、あなたは自分に向けられた期待への責任と、自分の人生への責任を同時に負うことになり、それは大きな重圧となります。しかし、そこであきらめずに、それをどう解決できるかを考えてみてください。あなたは自分を一回りも二回りも成長させてくれる機会を目の前にしています。

西安外国語大学 夏期留学

日本・中国文学科 2回生 寺尾 晃史



私は2016年9月の丸一ヶ月間を、中国の古都、西安で過ごしました。滞在の理由は、唐の時代の中国の文化に興味があり、過去に都(長安)が置かれた西安をこの目で見てみたいと以前から思っていたからです。西安のことだけを書いて、あまり参考にならないと思うので、留学を考えている人に向けて、私が感じたことを書こうと思います。留学というとやはり外国に行くことを不安に思っている人も多いのではないでしょうか。国の違い、文化の違い、価値観の違い、さまざまな「違い」が壁として立ちまわります。

でも、それに臆していたら、私たちはどこにも行けなくなってしまうのではないのでしょうか。私も留学前はどのような不安でしたが、怖がっていたら何も始まらない、いくら多くの「違い」があると言っても、相手は人間なんだからなんとかなる、と自分を奮起させました。

言葉が喋れないから、という理由で留学を躊躇っている人もいないのでしょうか。出国した時、私は冗談抜きで「ありがとう」と「これください」くらいしか会話で言えませんでした。現地での生活は特に困りませんでした。言葉が知らなくてもとっさに辞書を使えばなんとかなりますし、どんな局面も「ありがとう」と笑顔があれば大体切り抜けることができます。相手は人間なので。それに、現地に行けば嫌でも言葉は上達します。後から言語は習得できます。

だから、迷っているなら、飛び出しましょう。長期が難しいなら、短期でもやってみましょう。得られるものは、かかる費用よりも遥かに大きいです。きっと素敵な世界と、かけがえのない思い出があなたを待っているはずですよ。

発行日 2017年 3月

発行責任者 国際交流委員会委員長 川瀬光義
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5
TEL: 075-703-5905 Email: kokusai@kpu.ac.jp